

連載⑤2

内海善雄の 「やぶ睨み」論 「ネット社会」論

倫理観の低下は ネットの普及が一因か

最近、プロとしての「責任感」というものが世の中から急速に薄れてきていると思う。まず第一に、わが子の入学式を優先し、自分の受け持ちの入学式を欠席した女教師の事件である。

埼玉県教育委員会に寄せられた意見では「女性教諭への理解」が四四%で、「批判や苦情」の二二%を大きく上回ったとのこと。責任を放棄した教師にあきれられるよりも、そのことに理解を示す意見が多いことに嘆き、あきれ果てる。

この教師は、韓国セウォル号沈没事故で乗客の避難を顧みず真つ先に逃げた船長や船員たちとどこが異なるのだろうか。両者とも、その職責を放棄し自己の利益を優先したことしかも、その利益は一方は入学式参加、他方は人の生命と軽重の違いがあつたにせよ、自

己と他人との間で同一の利益の衝突があつたものであり、同種の行為である。

女教師が求めた利益はたかだかわが子の入学式への参加にすぎないが、船員たちが求めた利益は自己の生命そのものである。むしろ、船員たちに同情の念が湧いても道理があるような気がする。いったい何がゆえに教師は理解され、船員は非難されるのだろうか。

理研本来の責務を忘れたSTAP事件

もう一つ特筆すべきは、理研のSTAP細胞事件である。ずさんな研究や、安易にコピー論文を作成した小保方氏に対する批判、その状況を防止できなかった理研の組織体制を問題視する声、また逆に、小保方氏はすべての責任を負わせられていると同情する意見等々、メディアやネット上にはさまざまな意見が出てくる。しかし、理研の本来の任務と責務を問うものが不思議と見えない。

そもそも理研は、可能性を信じてSTAP細胞を作製すべく国民の税金を使用して研究をしているのである。そのいわば報告書たる論文に不正があつたことは許し難い不祥事であるが、忘れてはならないことは、STAP

出現するのである。

従来から、担任の子供のために自分の子供の入学式に出席できない先生には多少の同情心を抱く人もいたにちがいない。しかし、そんなことは人前であからさまに表現できず、天職を全うする理想的な教師像が社会の規範として支配していたのである。その建前の倫理観が、本音を言いやすい時代になつたことにより崩れてきたのではなからうか。

理研の場合も建前は、国の関連機関による人類に多大な貢献が期待されるSTAP細胞の成否にあつたはずが、人々の関心はもっぱら美人の若い女性研究者とその不正にあつた不正を発見した専門家のブログでの発信が広がり、それに素早く反応したメディア、その報道に反応する大衆の個人感情の発信、それをまた報じるメディアと、人々の本音の関心の連鎖が引き起こした狂想曲であつたように思う。

一方、セウォル号事件は、韓国のこととはいえあまりにもひどい職責放棄の諸事実に、船会社や船長の職責追及がサイバー上でも実社会でも炎上したのである。救命胴衣を着けて脱出の指示を待っていた何百人もの高校生のことを思うと胸が痛い。

しかし、もし乗客が老人一人きりであつたならばどうだろう。人々の関心も引かず、「船長は船と運命を共にしなければならぬ」という社会規範もそれほど

細胞の作製のための方法を発見することが理研の本来の任務であることである。

その担当者が「STAP細胞を作製でき」と主張しているのだから、本人に皆の前で作製させるのが筋ではないか。もし作製できなければ、それこそ、どうやれば作製できるのか研究を継続するのが理研の責務である。なぜ理研本来の任務を遂行しようとしなかったか。

論文不正の原因が未熟な研究者のせいだと他人事のように切り捨てた所長や、自分の責任ではないと言い訳をする共著者、そんな上司に、「捏造」とは過酷な判定だと不服訴えをする、不正行為を行った張本人と、理研の関係者は全員、本来の職責を忘れて内輪の争いに終始し、あまりにも醜い。不祥事を起こした民間会社の社長が、本人に直接の責任がなくても潔く辞任して社業を立て直そうする姿と極端にかけ離れているではないか。

本音を蔓延させるネット

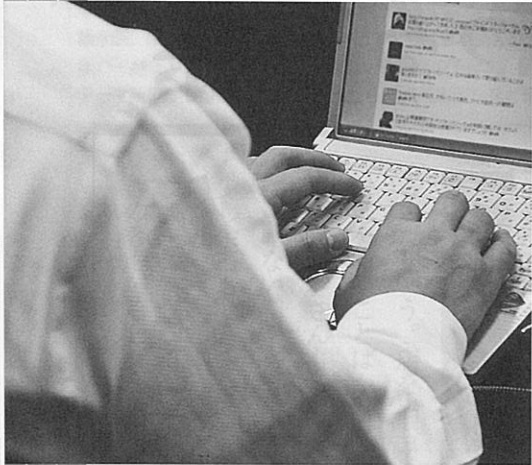
さて、このような社会的責任感の希薄化は今に始まつたことではない。しかし、今回の一連の事件で、船長や船員だけが社会から批

絶対的なものとは受け取られなかったかもしれない。

求められる倫理観の低下防止策

ネット社会の進展により、「責任感」に限らず既存の倫理観が急速に薄れてきているように思える。例えば、ポルノ映像が容易に見られる環境が羞恥心を否定し、コピーが容易にできる環境が人の意見と自分の意見を峻別することを曖昧にし、また、根拠のない情報でも匿名で容易に発信できる環境が嘘を言つてはならないという倫理をないがしろにしていくがごときである。

道徳や倫理は、健全な社会生活を維持するため利己的な感情や欲望を抑える方法として、人類がその長い歴史の中で習得した規範である。今、それが急速に低下すると、社会生活が崩壊する危険がある。道徳教育や宗教心の涵養などにより社会の倫理観を一定以上に保つことが、かつてなかったほど重要課題として浮上しているのではないか。



匿名性もあって本音の書き込みが蔓延する



内海善雄(うつみ よしお)

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省(現総務省)入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合(ITU)事務総局長就任。現在は一般財団法人「海外通信・放送コンサルティング協力」理事長。IEEE名誉会員。